

中国怪奇小説集

白猿伝・其他

岡本綺堂

青空文庫

第五の男は語る。

「唯今は『酉陽雜俎』と『宣室志』のお話がありました。そこで、わたくしには其の拾遺しゅういといったような意味で、唐代の怪談総まとめのようなものを話せという御注文ですが、これはなかなか大変でございます。とても短い時間には出来ることはありません。勿論、著名の物を少々ばかり紹介いたすに過ぎないと御承知ください。就きましたは、まず『白猿伝』を申し上げます。この作者の名は伝わって居りません。唐に歐陽詢おうようじゆんという大学者がありまして、後に渤海男ほっかいだんに封ぜられましたが、この人の顔が猿に似ているというので、或る人がいたずらにこんな伝奇を創作したの

であつて、本当に有つた事ではないという説があります。しかし
へ志怪の書へについて、その事実の有無を論議するのは、無用の
弁に近いかとも思われます。ともかくも古来有名な物になつて居
りまして、かの頼光らいこうの大江山おおえやま入りなども恐らくこれが粉本ふんぼん
であろうと思われれますから、事実の有無うむを問わず、ここに紹介す
ることに致します。

そのほかには、原化記げんかき、朝野僉載ちやうやせんさい、博異記はくいき、伝奇でんき、広異記こういき、
幻異志げんいしなどから、面白そうな話を選んで申し上げたいと存じます。
これらもみな有名の著作でありまして、一つ一つ独立して紹介す
るの価値があるのでございますが、あとがつかえて居りますから、
そのなかで特色のあるお話を幾つか拾い出すにとどめて置きます。

右あらかじめお含み置きください」

白猿伝

梁りよう（六朝りくちよう）の大同だいどうの末年、平南將軍りんぎん藺欽りんきんをつかわして南方を征討せしめた。その軍は桂林けいりんに至つて、李師古りしこと陳徹ちんてつを撃破した。別將の歐陽紇おうようこつは各地を攻略して長樂ちようらくに至り、ことごとく諸洞の敵をたいらげて、深く險阻けんその地に入り込んだ。歐陽紇の妻は白面細腰はくめんさいよう、世に優れたる美人であつたので、部下の者は彼に注意した。

「將軍はなぜ麗人を同道して、こんな蕃地へ踏み込んでお出いでに

なつたのです。ここらの山の神は若い女をぬすむといひます。殊に美しい人はあぶのうごぎいますから、よく気をお付けにならなければいけません」

紇はそれを聞いて甚だ不安になつた。夜は兵をあつめて宿舎の周囲を守らせ、妻を室内に深く閉じ籠めて、下婢かひ十余人を付き添わせて置くと、その夜は暗い風が吹いた。五更ごこう（午前三時—五時）に至るまで寂然せきぜんとして物音もきこえないので、守る者も油断して仮寝うたたねをしていると、たちまち何物かはいつて来たらしいので驚いて眼をさますと、將軍の妻はすでに行くえ不明であつた。扉とびらはすべて閉じたままで、どこから出入りしたか判らない。門の外は嶮けわしい峰つづきで、眼さきも見えない闇夜にはどこへ追つてゆ

くすべもない。夜が明けても、そこらになんの手がかりも見いだされなかった。

紇の痛憤はいうまでもない。彼はこのままむなしく還かえらないと決心して、病いと称してここに軍を駐とどめ、毎日四方を駈けめぐつて險阻の奥まで探り明かした。こうしてひと月あまりを経たるのち、百里（六丁一里）ほどを隔てた竹藪で妻の繡履ぬいぐつの片足を見付け出した。雨に湿ぬれ朽ちてはいたが、確かにそれと認められたので、紇はいよいよ悲しみ怒って、そのゆくえ搜索の決心をますます固めた。

彼は三十人の壯士をすぐつて、武器をたずさえ、糧食を背負い、巖窟がんくつに寝ね、野原で食事をして、十日あまりも進むうちに、宿

舎を去ること二百里、南のかたに一つの山を認めた。山は青く秀ひいでて、その下には深い溪たにをめぐらしていた。一行は木を編んで、険しい巖や翠あおい竹のあいだを渡り越えると、時に紅きものい衣が見えたり、笑い声がきこえたりした。

蔦つたかずらを攀よじて登り着くと、そこには良い樹を植えならべて、そのあいだには名花も咲いている。緑の草がやわらかに伸びて、さながら毛氈もうせんを敷いたようにも見える。あたりは清く静けく、一種の別天地である。

路を東にとって石門にむかうと、婦女数十人、いずれも鮮麗の衣服を着て歌いたわむれていたが、紇の一行を見てみな躊躇するようにならずにいた。やがて近づくと、かれらは一行にむかっ

て、なにしに来たかと訊きいた。紘は事情をつまびらかに打ち明けると、女たちは顔をみあわせて嘆息した。

「あなたの奥さんはひと月ほど前からここに来ておいですが、今は病気で寝ておられます。来てごらんなさい」

門をはいると、木の扉がある。内は寛ひろくて、座敷のようなものが三、四室ある。壁に沿とこうて床を設け、その床は綿わたに包まれている。紘の妻は石の榻とうの上に寝ていたが、畳たたみをかさね、茵しとねをかさねて、結構な食物がたくさんに列べてあった。たがいに眼を見合わせるとと、妻は急に手を振って、夫に早く立ち去れという意を示した。

女たちは言った。

「奥さんはこの頃お出でですが、わたし達の中にはもう十年もここに居る者がありません。ここは神霊ある物の棲む所で、自由に人を殺す力を持っています。百人の精兵でも、かれを取り押えることは出来ません。幸いに今は留守ですから、還らない間に早く立ち去るが好うございます。しかし美しい酒二石と、食用の犬十匹と、麻数十斤きんとを持ってお出でになれば、みんなが一致して彼を殺すことが出来ます。来るならば必ず正午ごろに来てください。それも直ぐに来てはなりません。十日を過ぎてお出でなさい」

それでは十日の後に再び来ると約束して、紇の一行は立ち帰った。それから美酒と犬と麻とを用意して、約束の時刻にたずねて行くと、女たちは待っていた。

「かれは酒が大好きで、酔うと力が満ちて来ると見えて、私たちに言いつけて縋いらいと糸で自分のからだを牀ゆかに縛り付けさせます。そうして、一つ跳ねあがると、糸は切れてしまうのです。しかし三本の糸をまき付けると、力が不足で切ることが出来ません。それですから、帛きぬのなかに麻を隠して置いて縛ったらば、おそらく切ることは出来まいと思われます。彼のからだはすべて鉄のようで刃物などは透りませんが、ただ臍へそのした五、六寸のところを大事そうに隠していますから、そこがきつと急所で、刃物を防ぐことが出来ないのであろうと察せられます」

女たちは更にかたわらの巖室いわむろを指さして教えた。

「そこは食物庫ぐらですから暫く忍んでおいでなさい。酒を花の下に

置き、犬を林のなかに放して置いて、わたし達の計略が成就じようじゆした時に、あなた方に合図をします」

その通りにして、一行は息を忍ばせて待つっていると、日も早やさる申の刻（午後三時―五時）とおぼしき頃に、練絹ねりぎぬのような物があなたほらの山から飛ぶが如くに走つて来て、たちまちに洞のなかにはいった。見れば、身のたけ六尺余の男で、美しい髯ひげをたくわえ、白衣を着て杖を曳いていた。かれは女たち大勢に取り巻かれて庭に出たが、たちまちに犬を見つけて驚き喜び、身を跳らせて引つ捕えたかと思うと、引き裂いて片端から啖くちらい尽くした。女たちは玉の杯で酒をすすめると、機嫌よく笑い興じながらかれは数斗との酒を飲んだ。

女たちはかれを扶けて奥にはいったが、そこでも又笑い楽しむ声がかきこえた。やや暫くして、女が出て来て紇の一行を招いたので、すぐに武器をたずさえて踏み込むと、一頭の大きい白猿が四^し足を牀^{ゆか}にくくられていて、一行を見るや慌て騒いで、しきりに身をもがいても動くことが出来ず、いたずらに電光のような眼を輝かすばかりであった。一行は先を争つて刃を突き立てたが、あたかも鉄石の如くである。しかも臍の下を刺すと、刃は深く突き透つて、そそぐが如くに血が流れた。

「ああ、天がおれを殺すのだ」と、かれは大きい溜め息をついた。「貴様たちの働きではない。しかし貴様の女房はもう孕^{はら}んでいる。必ずその子を殺すな。明天子に逢つて家を興すに相違ないぞ」

言い終つて彼は死んだ。その庫くらをさがすと、宝物珍品が山のよ
うに積まれていて、およそ人世の珍とする物は備わらざるなしと
いう有様であつた。名めい香こう数こく斛、宝劍一雙そう、婦女三十人、その婦
女はみな絶世の美女で、久しいものは十年もとどまっている。容
色おとろえた者はどこへか連れて行かれて、どうなつてしまふか
判らない。女を取り、物を取るのはずべて自分ひとりで、他に党
類はない。朝はたらいで顔を洗い、帽をかぶり、白衣を着るが、
寒さ暑さに頓着せず、全身は長さ幾寸の白い毛に蔽おおわれている。
かれが家にある時は、常に木彫りの書物を読んでいるが、その
文字は符篆ふてんの如くで、誰にも読むことは出来ない。晴れた日には
両手に劍を舞わずが、その光りは身をめぐつて飛び、あたかも円

月の如くである。飲み食いは時を定めず、好んで木実このみや栗を食うが、もつとも犬をたしなみ、啖い殺して血を吸うのである。午ひるを過ぎると飄然として去り、半日に数千里を往復して夕刻には必ず帰つて来る。夜は婦女にたわむれて暁に至り、かつて眠ったことがない。要するにかかく※のたぐいである。

ことしの秋、木の葉が落ち始める頃に、かれはさびしそうに言つた。

「おれは山の神に訴えられて、死罪になりそうだ。しかし救いをもろもろの霊ある物に求めたから、どうにか免まぬかれるだろう」

前月、書物を収めてある石橋が火を発して、その木もっかん簡を焼いてしまった。かれは書物を石の下に置いたのである。かれはちよう悵

然^{ぜん}としてまた言った。

「おれは千歳^{せんざい}にして子がなかつたが、今や初めて子を儲けた。おれの死期もいよいよ至つた」

かれはまた、女たちを見まわして、涙を催しながら言った。

「この山は險阻で、かつて人の踏み込んだことのない所だ。上は高くして樵夫^{きしり}なども見え、下は深うして虎狼怪獸^{ころう}が多い。ここへもし来る者があれば、それは天の導きというものだ」

怪物の話はこれで終つた。紘はその宝玉や珍品や婦女らを連れて帰つたが、婦女のうちには我が家を知つていて、無事に戻る者もあつた。紘の妻は一年の後に男の子を生んだが、その容貌は父に肖^にていた。

紇は後に陳ちんの武帝ぶていのために誅せられたが、彼は平素から江こう総そうと仲がよかった。江総は紇の子の聡明なるを愛して、常に自分の家に留めて置いたので、紇のほろびる時にもその子は難をまぬかれた。生長の後、その子は果たして文学に達し、書を善くし、名声を一代に知られた。

(白猿伝)

女侠

唐の貞元年中、博はくり陵りょうの崔慎思さいしんしが進士しんしに挙げられて上京したが、京に然るべき第宅ていたくがないので、他人の別室を借りていた。家主は別の母屋おもやに住んでいたが、男らしい者は一人も見えず、三

十ぐらゐの容貌きりようのよい女と唯ふたりの女中がいるばかりであつた。崔は自分の意を通じて、その女を妻にしたいと申し入れると、彼女は答えた。

「わたくしは人に仕えることの出来る者ではありません。あなたとは不釣合ごじついです。なまじいに結婚して後日の恨みを残すような事があつてはなりません」

それでは妾めかけになつてくれと言つと、女は承知した。しかも彼女は自分の姓を名乗らなかつた。そうして二年あまりも一緒に暮らすうちに、ひとりの子を儲けた。それから数月の後、ある夜のことである。崔は戸を閉じ、帷とばりを垂れて寝しんに就くと、夜なかに女の姿が見えなくなつた。

崔はおどろいて、さては他にかんぶ姦夫があるのかと、いきどおり憤怒に堪えぬままに起き出でて室外をさまよっている時、おぼろの月のひかりに照らされて、彼女は屋上から飛び降りて来た。白の練絹を身にまとつて、右の手には、あいくち匕首、左の手には一人の首をたずさえているのである。

「わたくしの父は罪なくして郡守に殺されました。その仇を報ずるために、城中に入り込んで数年を送りましたが、今や本意を遂げました。ここに長居は出来ません。もういとまお暇をいたします」
彼女は身支度して、かの首をふくろに収め、それを小脇にかかえて言った。

「わたくしは二年間あなたのお世話になりました、幸いに一人の

子を儲けました。この住居も二人の奉公人もすべてあなたに差し上げますから、どうぞ子供の養育を願います」

男に別れて牆かきを越え、家を越えて立ち去ったので、崔も暫くはただ驚嘆するのみであった。やがて女はまた引返して来た。

「子供に乳をやって行くのを忘れましたから、ちよつと飲ませて来ます」

彼女は室内にはいったが、やや暫くして出て来た。

「乳をたんと飲ませました」

言い捨てて出たまま、彼女はかさねて帰らなかつた。それから時を移しても、赤児あかごの啼く声がちつとも聞えないので、崔は怪しんでうかがうと、赤児もまた殺されていた。

その子を殺したのは、のちの思いの種を断つためであろう。昔の侠客もこれには及ばない。

(原化記)

靈鏡

唐の貞元年中、漁師十余人が数艘そとうの船に小網を載せて漁に出た。蘇州そしゅうの太湖が松江しょうこうに入るところである。

網をおろしたがちつとも獲物えものはなかつた。やがて網にかかったのは一つの鏡で、しかもさのみに大きい物でもないので、漁師はいまいますがって水に投げ込んだ。それから場所をかえて再び網をおろすと、又もやかの鏡がかかったので、漁師らもさすがに不

思議に思つて、それを取り上げてよく視ると、鏡はわずかに七、八寸であるが、それに照らすと人の筋骨きんこつから臟腑ぞうふまではつきりと映つたので、最初に見た者はおどろいて氣絶した。

ほかの者も怪しんで鏡にむかうと、皆その通りであるので、驚いて倒れる者もあり、嘔吐はきけを催す者もあつた。最後の一人は恐れて我が姿を照らさず、その鏡を取つて再び水中に投げ込んでしまつた。彼は倒れている人びとを介抱して我が家へ歸つたが、あれは確かに妖怪であろうと言ひ合つた。

あくる日もつづいて漁に出ると、きようは網に入る魚が平日の幾倍であつた。漁師のうちで平生から持病のある者もみな全快した。故老の話によると、その鏡は河や湖水のうちに在つて、数百

年に一度あらわれるもので、これまでも見た者がある。しかもそれが何の精であるかを知らないという。

(同上)

仏像

白鉄余はくてつよは延州えんしゅうの胡人こじん(西域せいいきの人)である。彼は邪道をもつて諸人を惑わしていたが、深山の柏の樹の下に銅あかがねの仏像を埋め、その後数年、そこに草が生えたのを見すまして、土地の人びとを欺あざむいた。

「昨夜わたしが山の下を通ると、仏のひかりを見た。日をさだめて精進しょうじん潔齋けつさいをして、尊みほとけい御みほとけ仏みほとけを迎えることにしたい」

定めの日に数百人をあつめて、ここらという所を掘りかえしたが、仏は見付からなかつた。彼はまた言つた。

「諸人が誠心をささげて布施物ふせもつを供えなければ、仏の姿を拝むことは出来ない」

集まつている男女はあらそつて百余万錢を供えると、彼はさきに埋めたところを掘り起して、一体の仏像を示した。その噂が四方に伝わって、それを拝ませてくれという者が多くなると、彼はまた宣言した。

「尊い御仏を拝むと、万病が本復ほんぷくする」

その計略成就して、數百里のあいだの老若男女ろうにやくなんによがみな集まつた。そこで、紫や緋ひや黄の綾絹あやぎぬをもつて幾重にも仏像をつつ

み、拝む者があれば先ずその一重を剥いで見せる。一回の布施が十萬錢、その正体を拝むまでには幾十萬錢に及ぶのであった。

こんな詭計きげいを用いているうちに、一、二年の後には土地の者がみな彼に帰伏した。彼は遂に乱をおこして、みずから光王こうおうと称し、もろもろの官職を設け、長吏ちやうりを置き、諸国の禍いをなすこと数年に及んだので、朝廷は將軍程務ていむてい挺に命じてこれを討たしめ、かれらをほろぼして光王を斬つた。

(朝野僉載)

孝子

東海に郭純かくじゆんという孝子があつた。母を喪うしなつて彼は大いに哭こく

した。その哭するごとに、鳥の群れがたくさん集まって来るのである。官から使者を派して取調べさせると、果たしてその通りであつたので、彼は孝子として村の入口に表彰された。

後に聞くと、この孝子は哭するごとに、地上に餅を撒き散らし、て鳥にあたえた。それが幾たびも続いたので、その泣き声を聞きつけると、鳥の群れは餅を拾うために集まって来たのであつた。

(同上)

壁龍

柴さい紹しょうの弟なにかしは身も軽く、足も捷はやく、どんな所へでも

身を躍らせてのぼるばかりか、十余歩ぐらいは飛んで行った。

唐の太宗皇帝たいそうが彼に命じて長孫無忌ちようそんむき（太宗の重臣）の鞍を

取つて来いと言つた。同時に無忌にも内報して、取られないように警戒しろと注意した。その夜、鳥のようなものが無忌の邸内に飛び込んで、二つの鞍を二つに切つて持ち去つた。それ逃がすなと追いかけたが、遂に捉え得なかつた。

帝はまたかれに命じて丹陽公主たんようこうしゆ（公主Ⅱ皇女）の枕を取つ

て来いと言つた。それは金をちりばめた函はこ付きの物である。かれは夜半にその寢室へ忍び入つて、手をもつて睡眠中の公主の顔を撫でた。思わず頭をあげるあいだに、かれは他の枕と掬すりかえて来た。公主は夜の明けるまでそれを覺らなかつた。

又ある時、彼は吉莫靴かわぐつをはいて、石瓦の城に駈けあがった。城上の牆かきには手がかりがないので、かれは足をもつて仏殿の柱を踏んで、檐のきさきに達し、さらに椽たるきを攀よじて百尺の楼閣に至った。実になんの苦もないのである。太宗帝は不思議に思った。

「こういう男は都の近所に置かない方がよい」

彼は地方官として遠いところへ遷うつされた。時の人びとは彼を称して壁龍へきりゆうと叫よびた。

太宗は又かつて長孫無忌に七宝帯を賜わった。そのあたい千金である。この当時、段師子だんししと呼ばれる大泥坊があつて、屋上の椽のあいだから潜り込んで無忌の枕もとに降り立った。

「動く、命がありませんぞ」

彼は白刃を突き付けて、その枕の函の中から七宝帯を取り出した。更にその白刃を床に突き立てて、それを力に飛びあがって、ふたたび元の椽のあいだから逃げ去った。

(同上)

登仙奇談

唐の天^{てん}宝^{ぼう}年中、河南^{かなん}緱^{こう}子^し県の仙鶴^{せんかく}觀^{かん}には常に七十余人の道士が住んでいた。いずれも専ら修道を怠らない人びとで、未熟の者はここに入ることが出来なかつた。

ここに修業の道士は、毎年九月三日の夜をもつて、一人は登^{とう}仙^せすることを得るといふ旧例があつた。

夜が明ければ、その姓名をしるして届け出るのである。勿論、誰が登仙し得るか判らないので、毎年その夜になると、すべての道士らはみな戸を閉じず、思い思いに独り歩きをして、天の迎いを待つのであった。

ちようけつちゆう
張 竭

忠がここの県令となつた時、その事あるを信じな

つた。そこで、九月三日の夜二人の勇者に命じて、武器をたずさえて窺わせると、宵のあいだは何事もなかつたが、夜も三さんこう更に至る頃、一匹の黒い虎が寺内へ入いり来たつて、一人の道士をくわえて出た。それと見て二人は矢を射かけたが中あたらなかつた。しかも虎は道士を捨てて走り去つた。

夜が明けて調べると、昨夜は誰も仙人になつた者はなかつた。

二人はそれを張に報告すると、張は更に府に申し立てて、弓矢の人数をあつめ、仙鶴觀に近い太子陵の東にある石穴のなかを獵るあさと、ここに幾匹の虎を獲た。穴の奥には道士の衣冠や金簡のたぐい、人の毛髪や骨のたぐいがたくさんに残っていた。これがすなわち毎年仙人になつたという道士の身の果てであつた。

その以来、仙鶴觀に住む道士も次第に絶えて、今は陵を守る役人らの住居となつている。

(博異記)

蔣武

唐の宝曆ほうれき年中、循州河源じゆんしゆうかげんに蔣武しやうぶという男があつた。骨

格たくましく、豪胆剛勇の生まれで、山中の巖窟に独居して、狩
 獵に日を送っていた。彼は蹶張^{けつちやう}を得意とし、熊や虎^{ひやう}や豹^{ひやう}が、
 その弦^{つる}音^{おと}に応じて斃^{たお}れた。蹶張^{けつちやう}というのは片足で弓を踏ん張つ
 て射るのである。その鏃^{やじり}をあらためると、皆その獸の心^{むね}をつらぬ
 いていた。

ある時、甚だ忙がしそうに門を叩く者があるので、蔣は扉を隔
 ててうかがうと、一匹の猩^{しやうじやう}々^{じやう}が白い象にまたがっていた。蔣
 は猩々がよく人の言葉を語ることを知っているので、内から訊^き
 いた。

「象と一緒に来たのはどういうわけだ」

「象に危難^{せま}が逼^{せま}って居ります。わたくしに人間の話が出来るとい

うので、わたくしを乗せてお願いに出たのでございます」と、猩猩は答えた。

「その危難のわけを言え」と、蔣はまた訊いた。

「この山の南二百余里のところ、天にそびゆる大きい巖いわ穴あながございます」と、猩猩は言った。「そのなかに長さ数百尺の巴うわば蛇みが棲んで居ります。その眼はいなずまのごとく、その牙きばはつるぎの如くで、そこを通る象の分類はみな呑まれたり噬かまれたりします。その難に遭うもの幾百、もはや逃げ隠れるすべもありません。あなたが弓矢を善くするのを存じて居りますので、どうぞ毒矢をもってかれを射殺して、われわれの患うれいを除いて下されば、かならず御恩報じをいたします」

象もまた地にひざまずいて、涙を雨のごとくに流した。

「御承知ならば、矢をたずさえてお乗り下さい」と、猩々はうながした。

蔣は矢に毒を塗って、象の背にまたがった。行けば果たして巖の下に二つの眼が輝いて、その光りは数百歩を射るのであった。

「あれが蛇の眼です」と、猩々は教えた。

それを見て、蔣も怒った。彼は得意の蹶張をこころみて、ひと矢で蛇の眼を射ると、象は彼を乗せたままではし奔り避けた。やがて巖穴のなかでは雷の吼えるような声がして、大蛇はだいじや躍り出た。たうち廻ると、数里のあいだの木も草も皆その毒気に焼けるばかりであった。蛇は狂い疲れて、日の暮れる頃にたお仆れた。

それから穴のあたりを窺うと、そこには象の骨と牙とが、山の
 ように積まれていた。十頭の象があらわれて来て、その長い鼻で
 紅い牙一枚ずつを捲いて蔣に獻じた。それを見とどけて、猩々も
 別れて去った。蔣は初めの象に牙を積んで帰ったが、後にその牙
 を売って大いに資産を作った。

(伝奇)

笛師

唐の天宝の末に、安祿山あんろくざんが乱をおこして、潼関どうかんの守りも敗
 れた。都の人びとも四方へ散乱した。梨園りえんの弟子ていしのうちに笛師ふえしが
 あつて、これも都を落ちて終南山しゅうなんざんの奥に隠れていた。

そこに古寺があつたので、彼はそこに身を忍ばせていると、あの夜、風清く月明らかであるので、彼はやるかたもなき思いを笛に寄せて一曲吹きすさむと、りゆうりよう唳の聲は山や谷にひびき渡つた。たちまちにそこへ怪しい物がはいつて来た。かしらは虎で、かたちは人、身には白い着物を被きていた。

笛師はおどろき懼おそれて、階をくだつて立ちすくんでいると、その人は言つた。

「いい笛の音ねだ。もつと吹いてくれ」

よんどころなしに五、六曲を吹きつづけると、その人はいい心持そうに聴きほれていたが、やがておおいびきで寝てしまった。

笛師はそつと抜け出して、そこらの高い樹きの上に攀よじ登ると、枝

や葉が繁っているので、自分の影をかくすに都合がよかった。やがてその人は眼をさまして、笛師の見えないのに落胆したらしく、大きい溜め息をついた。

「早く喰わなかったので、逃がしてしまった」

彼は立つて、長くうそぶくと、暫くして十数頭の虎が集まつて来て、その前にひざまずいた。

「笛吹きの小僧め、おれの寝ている間に逃げて行った。路を分けて探して来い」と、かれは命令した。

虎の群れはこころ得て立ち去ったが、夜の五更ごこうの頃に帰つて来て、人のように言った。

「四、五里のところを探し歩きましたが、見付かりませんでした」

その時、月は落ちかかつて、斜めに照らす光りが樹の上の人物を映し出した。それを見てかれは笑った。

「貴様は雲かすみと消え失せたかと思つたが、はは、此処ここにいたのか」

かれは虎の群れに指図して、笛師を取らせようとしたが、樹が高いので飛び付くことが出来ない。かれも幾たびか身を跳らせたが、やはり目的を達しなかつた。かれらもとうとう思い切つて立ち去ると、やがて夜もあけて往来の人も通りかかつたので、笛師は無事に樹から離れた。

(広異記)

昔、ある書生が路で小さい蛇に出逢った。持ち帰って養つていると、数月の後にはだんだんに大きくなった。書生はいつもそれを担にないあるいて、かれを担たんせい生と呼んでいたが、蛇はいよいよ長大になつて、もう担い切れなくなつたので、これを范はん県の東の大きい沼のなかへ放してやつた。

それから四十余年の月日は過ぎた。かの蛇は舟をくつがえすような大蛇だいじやとなつて、土地の人びとに沼の主ぬしと呼ばれるようになった。迂闊に沼に入る者は、かならず彼に吞まれてしまった。一方の書生は年すでに老いて他国にあり、何かの旅であたかもこの沼のほとりを通りかかると、土地の者が彼に注意した。

「この沼には大蛇が棲んでいて人を食いますから、その近所を通らないがよろしゅうございます」

時は冬の最中^{さなか}で、氣候も甚だ寒かったので、今ごろ蛇の出る筈はないと、書生は肯^きかずにその沼へさしかかった。行くこと二十里余、たちまち大蛇があらわれて書生のあとを追って来た。書生はその蛇の形や色を見おぼえていた。

「おまえは担生ではないか」

それを聞くと、蛇はかしらを垂れて、やがてしずかに立ち去った。書生は無事に范県にゆき着くと、県令は蛇を見たかと訊いた。見たと答えると、その蛇に逢いながら無事であったのは怪しいというので、書生はひとまず獄屋につながれた。結局、彼も妖^{よう}妄^{もう}

の徒であると認められて、死刑におこなわれることになった。書生は心中大いに憤った。

「担生の奴め。おれは貴様を養ってやったのに、かえっておれを死地におとしいれるとは何たることだ」

蛇はその夜、県城を攻め落して一面の湖みずうみとした。唯その獄屋だけには水が浸ひたさなかつたので、書生は幸いに死をまぬかれた。

天宝の末年に独どっこせん孤こ暹せんという者があつて、その舅しゅうとは范県の県令となつていた。三月三日、家内の者どもと湖水に舟を浮かべていると、子細もなしに舟は俄かに顛覆して、家内大勢がほとんど溺死しそうになつた。

(同上)

板橋三娘子

べん
州の西に板橋店はんきょうてんというのがあつた。店の姐さんは三娘さんじよ子うしといい、どこから来たのか知らないが、三十歳あまりの独り者で、ほかには身内もなく、奉公人もなかつた。家は幾間いくまかに作られていて、食い物を売るのが商売であつた。

そんな店に似合わず、家は甚だ富裕であるらしく、驢馬ろばのたぐいを多く飼つていて、往来の役人や旅びとの車に故障を生じた場合には、それを牽ひく馬匹ばひつを廉やすく売つてやるので、世間でも感心な女だと褒めていた。そんなわけで、旅をする者は多くここに休んだり、泊まつたりして、店はすこぶる繁昌した。

唐の元和中げんな、許州きよの趙季和ちようきわという旅客が都へ行く途中、ここにいつしゆく一宿した。趙よりも先に着いた客が六、七人、いずれも榻とうに腰をかけていたので、あとから来た彼は一番奥の方の榻に就いた。その隣りは主婦あるじの居間であつた。

三娘子は諸客に対する待遇すこぶる厚く、夜ふけになつて酒をすすめたので、人びとも喜んで飲んだ。しかし趙は元來酒を飲まないのので、余り多くは語らず笑わず、行儀よく控えていると、夜の二更（午後九時—十一時）ごろに人びとはみな酔い疲れて眠りに就いた。三娘子も居間へかえつて、扉を閉じて灯を消した。

諸客はみな熟睡しているが、趙ひとりには眠られないので、幾たびか寝返りをしているうちに、ふと耳に付いたのは主婦の居間で

何かごそごそいう音であつた。それは生きてゐる物が動くように聞えたので、趙は起きかえつて隙間から窺うと、あるじの三娘子は或るうつつわを取り出して、それを蠟燭の火に照らし視た。さらに手箱のうちから一具の鋤すきくわと、一頭の木ぼくぎゆう牛と、一個の木ぼくじん人を取り出した。牛も人も六、七寸ぐらいの木彫り細工である。それらを竈かまどの前に置いて水をふくんで吹きかけると、木人は木馬を牽き、鋤すきくわをもつて牀ゆかの前の狭い地面を耕し始めた。

三娘子はさらにまた、ひと袋の蕎麦そばの種子たねを取り出して木人にあたえると、彼はそれを播まいた。すると、それがまた、見るみるうちに生長して花を着け、実を結んだ。木人はそれを刈ふつて踐ふんで、たちまちに七、八升の蕎麦粉を製した。彼女はさらに小さい

臼うすを持ち出すと、木人はそれを搗ついて麵を作った。それが済むと、彼女は木人らを元の箱に収め、麵をもつて焼しやうべい餅い数枚を作った。暫くして雞とりの声こゑがきこえると、諸客は起きた。三娘子はさきに起きて灯をともし、かの焼餅を客にすすめて朝の点てん心しんとした。しかし趙はなんだか不安心であるので、何も食わずに早々出発した。彼はいったん表へ出て、また引つ返して戸の隙から窺うと、他の客は焼餅を食い終らないうちに、一度に地を蹴ふつていなないた。かれらはみな変じて驢馬ろぎんとなったのである。三娘子はその驢馬を駆かつて家のうしろへ追おい込み、かれらの路銀ろぎんや荷物ものぶをことごとく巻まき上げてしまった。

趙はそれを見ておどろいたが、誰にも秘ひして洩はらさなかつた。

それからひと月あまりの後、彼は都からかえる途中、再びこの板橋店へさしかかったが、彼はここへ着く前に、あらかじめ蕎麦粉の焼餅を作らせた。その大きさは前に見たと同様である。そこで、なにげなく店に着くと、三娘子は相変らず彼を歓待した。

その晩は他に相客がなかったので、主婦はいよいよ彼を丁寧に取扱った。夜がふけてから何か御用はないかとたずねたので、趙は言った。

「あしたの朝出発のときに、てんしん点心を頼みます……」

「はい、はい。間違いなく……。どうぞごゆるりとおやすみください」

こう言つて、彼女は去つた。

夜なかに趙はそつと窺うと、彼女は先夜と同じことを繰り返していた。夜があげると、彼女は果物と、焼餅数枚を皿に盛って持ち出した。それから何かを取りに行つた隙をみて、趙は自分の用意して来た焼餅一枚を取り出して、皿にある焼餅一枚と掬^すり換えて置いた。そうして、三娘子を油断させるために、自分の焼餅を食つて見せたのである。

いざ出発というときに、彼は三娘子に言った。

「実はわたしも焼餅を持っています。一つたべて見ませんか」
取り出したのはさきに掬りかえて置いた三娘子の餅である。

彼女は礼をいって口に入れると、忽ちにいなないて驢馬に變じた。それはなかなか壮健な馬であるので、趙はそれに乗つて出た。

ついでにかの木人と木牛も取つて来たが、その術を知らないの
それを用いることが出来なかつた。

趙はその驢馬に乗つて四方を遍歴したが、かつて一度もあやま
ちなく、馬は一日に百里を歩あゆんだ。それから四年の後、彼は関に
入つて、華岳廟かがくびようの東五、六里のところへ来ると、路ばたに一人
の老人が立つていて、それを見ると手を拍うつて笑つた。

「板橋の三娘子、こんな姿になつたか」

老人はさらに趙にむかつて言つた。

「かれにも罪はありますが、あなたに逢つては堪まらない。あま
り可哀そうですから、もう赦ゆるして下さい」

彼は両手で驢馬の口と鼻のあたりを開くと、三娘子はたちまち

元のすがたで跳り出た。彼女は老人を拝し終つて、ゆくえも知れずに走り去つた。

(幻異志)

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

中国怪奇小説集

白猿伝・其他

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>